
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 64. 2022. 12

「博物館に押しかけよう会」の再開-----	在田 一則	1
小樽市総合博物館運河館を訪ねる-----	稲場 良雄	2
夏季企画展「感じる数学」でのボランティア活動 -----	上杉 英機	3
大学ミュージアムが面白い -----	藤井 利侑	4
カルチャーナイト 2022 ポプラチェンバロ コンサート -----	永岡 明美	6
3年ぶりのカルチャーナイト公演 -----	長谷川健太	7
社会人が放送大学に通うこと -----	松田 大徳	8

活動報告

「博物館に押しかけよう会」の再開

ボランティア会 会長 在田一則

ボランティアの皆さん

札幌は初雪らしい初雪もないまま師走に入ろうとしています。お元気にお過ごしのことと思います。

暖冬気味ですが、一方では北海道の新型コロナウイルス感染症の1日の新規感染者数は10月末から急増し、11月中旬には1万人を超える日もあり、東京都とトップ争いを続けています。季節の変わり目で、寒さに向かう時期であることも原因なのでしょうか。

この新型コロナウイルス感染症は、札幌では2020年2月のさっぽろ雪まつりの頃に見つかりましたので、ウィルスとの戦いはもう3年近くになります。コロナウィルス感染予防の基本である三密（密閉・密集・密接）を回避するという事でボランティアの会の活動も、『ボランティアニュース』の発行以外はできなく、各グループのボランティア活動も何かと不便を強いられていることと思います。

そのような中、9月9日に開催したボランティアの会グループ連絡会で、ボランティア同士の交流が困難な状況ではあるが、この鬱々とした雰囲気をも少しでも打破したいという話になり、議論の結果、「談話会」のような講演会的なものではなく、比較的三密を避けることのできる「博物館へ押しかけよう会」

を再開しようという話になりました。日程を10月22日とし、小樽市総合博物館運河館に電話して平常通りの開館を確認し、展示解説のお願いもしました。

総博ボランティアMLの記録を見ると、2020年10月21日に「本日のボランティアの会連絡会で、29日（土）に行う予定だった小樽市総合博物館運河館訪問について検討し、最近の状況を勘案して、延期することにいたしました。新型コロナウイルス感染症の終息後に訪問を考えます。ご了承ください」の発信記録がありました。約2年半の延期でした。

まだ、終息とは言えませんが、財務省の資料によると、今夏の第7波における致死率は、東京では60歳未満が0.01%、60歳以上が0.64%、大阪では60歳未満が0.004%、60歳以上が0.475%とのこと。これから冬に向かって心配される季節性インフルエンザの致死率（60歳未満で0.01%、60歳以上で0.55%）とあまり変わらないということです。これはワクチン接種の効果のようです。

まだまだ油断はなりませんが、三密回避やマスク着用を守りつつ、「博物館へ押しかけよう会」を中心にボランティアの会の活動を進めていくことを考えています。よろしくお願いいたします。

活動報告

小樽市総合博物館運河館を訪ねる

第二農場ボランティア 稲場良雄

今年は東博（東京国立博物館）150年ということで連日放映された、いわゆるお宝映像を見たことに刺激をうけたせいか、お宝よりも実物を見たいと思っていた時に、北海道大学総合博物館ボランティア会が企画する「博物館へ押しかけよう会」を知り参加した。

10月22日小樽駅集合、秋晴れの天気で少し遠足気分。小樽駅から海に向かって10分ほど歩き左に折れたところに「小樽市総合博物館運河館」があった。重厚な石造りのようにみえる建物は1889（明治22）年に建てられた「旧小樽倉庫」を利用したもので、木骨の外壁に軟石を張り巡らせたもので、小樽倉庫建築独特のものらしい。屋根は瓦葺き、お城みたいにシャチホコまで乗っている。

「旧小樽倉庫」は穀物や海産物を保管する倉庫で、堅牢な作りながら中庭があり、荷物の仕分や運搬などの作業を考えたもので、当時の商人の経営感覚や作った職人のレベルはかなり高かったと見受けられる。当日は小樽市総合博物館長の石川直章さんから明治初期の教育者 鷗目 貫一郎の『鷗目日誌』を通して見た当時の小樽の様子もずめの解説や北前船、小樽の街の変遷などを分かり易く聞くことが出来て得をした気分になる。

館内にある北前船の模型や帆船の「帆の部分」の実物などを見ていると、当時、蝦夷地と呼ばれていた北海道の海産物や北陸地方の米などを日本海を経て大阪まで運び関西からは塩や酒などを運んだこの長い過酷な航海の船乗りの人たちのたくましさにはいまさらながら驚く。

館内には数多くの展示物があり、倉庫を作る壁に使われた軟石を切り出す道具、当時の鯨漁の漁具、鯨漁の風景を描いた屏風などの数多くの展示品の中に当時貴重であり珍しかったオルガンなども見受けられ、北前船がもたらした経済効果は測り知れないものだったと思う。

当時の小樽は北海道の心臓とも呼ばれたくらいで経済の中心を占めていたのだろう。今は金融資料館になっている「旧日本銀行小樽支店」の気品と貫禄を備えた建物からもうかがえる。

だが時代が進み汽船の発達とともに日本海経由（西廻り）は衰退してゆく。ニシンの不漁も追打ちをかけ、小樽の街も否応なく変わってゆく。

今、小樽といえば「運河」というくらい象徴的存在といっても過言ではないが、1923（大正12）年に作られた小樽発展に貢献した運河もその後やっかいもの扱いされ、長い間の埋め立て大論争の末、1986（昭和61）年に一部を埋め立て、幅も半分を道路（散策路）ということで結着がついたが、今の小樽は運河がなければ、これほどの観光地となっただろうか？観光小樽の顔となっている小樽運河がこの先どうなっていくのかわからないが・・・。

小樽運河博物館を見ての帰りの昼下がり小樽運河の散策路をぶらり歩く。そういえば少し昔になるが、一度引退した大物演歌歌手が再出発として出した「小樽運河」という歌があった。曲は大ヒットして、この世界では奇跡的ともいえる復活を成し遂げた。彼女は「小樽運河」の成り立ちや今までの推移を知って歌っていたのだろうか。

♪ 誰のせいでもないけれど、
これで終わるの？ 始まるの？
・・・ああ、小樽運河～ ♪



運河館中庭にて

活動報告

夏季企画展「感じる数学」でのボランティア活動

北大理学部数学科3年 上杉英機

この夏、北大総合博物館で開催された企画展「感じる数学～ガリレイからポアンカレまで～」(7月30日～9月25日)にボランティアとして参加した際の出会いと再発見について少し書き残しておこうと思います。

僕は北大の理学部数学科で学んでいる3年生です。ゼミ形式の授業の先生がこの企画展の主催者の一人だったこともあり、来場者の方に展示の説明をするボランティアをすることになりました。実際にボランティアが始まってみるとその来客数の多さに驚きました。絶え間なく人々が訪れ、展示ブースが満員になることも少なくありませんでした。パッと見ただけでも老若男女さまざまな人が来場していて実際に声をかけてみると、学生のころ文系だった社会人の方もいれば現役の理系大学生の方、理科が好きな小学生のお孫さんといっしょに来ているおばあさんまでそのバックグラウンドはさまざまです。当然説明するときには使える数学的な道具も相手によって変わってきますし、飛び出してくる質問も千差万別でした。

その中で、説明する際には相手が見ている世界の輪郭や解像度、あるいは位相といったものに合わせて自分の言葉を相手の言葉に翻訳していかなくてはと強く感じました。僕は偏見という意味で用いられる「色眼鏡」という表現をより広く価値観や言葉遣いなどの意味で用いるのが少し好きなのですが、その意味で“説明する”という行為は相手が掛けている色眼鏡の色に合わせて自分の色眼鏡を変化させつつ、同時に相手の色眼鏡にも色を足していく行為とも言い換えることができそうです。そしてこれらの行為は双方向なもので、説明を聞く側もこちらの色眼鏡に合わせて、むしろその変化を味わうために展示を訪れてくださる方が多いと感じました。

そもそもなぜ数学が僕にとって“どういうわけかやってしまうこと”の一つになったのか一言で答えるならばそれは「偶然」です。その偶然が起きたのは高校一年の時に、当時数学の点数がいいわけではありませんでしたが、すこぶる点数の悪かった現代文の勉強として長文の要約をしたり、ラジオを聴いたり、ゲームをやり込んだりしているうちに現代文の成績とともに数学の成績もどんどん伸びていきました。ほどなくして数学は僕にとって高校や親との問題から少し離れることのできる心の拠り所、というより逃げ場所になっていきました。数学の平等で割り切った雰囲気は湿っぽく込み入った現実と対照的で心地よかったのか、単に理系一家で育ったからなのか。なぜ数学だったのかはわかりませんが、確かなことはさまざまなほかの言葉が数学を自分の言葉と呼べるほどにまで育ててくれて、また数学が逆に目の前の現実の複雑さや面白さを表現する手段を与えてくれたということです。この相互作用はとてつもない安心感と彩りをもたらしてくれていると今でも感じます。

そういったこともあって、数学の言葉遣いや肌触り、匂いを感じるために博物館を訪れてくださった方々と互いの言葉を交わすことができたのは、個人的にとっても実りある体験でしたし、来場者の方にとってもそうであったのならこの上ないことだと思います。自分の言葉をあたため、外の世界を知る。その両面があつた企画展の空間にはあつたと思返しています。これを読んでいる皆さんにとっての自分の言葉や自分の言葉になっていくものは数学とは別の何かかもしれませんが、自分を支えて他者と繋げてくれるような言葉に皆さんが出会うことができるよう祈っています。

活動報告

大学ミュージアムが面白い

第二農場ボランティア 藤井利侖

大学を卒業して50年が経ち、企業勤めも終えて、目下は経営&技術コンサルタント業を自営しています。そしてその活動の本拠地は企業活動をしていた関東と、故郷札幌に置くこととしました。関東での活動は日本の多くの企業が集積しているのだから当然として、札幌には自分を育ててくれた故郷なので何か役に立ちたいとの思いがあったのと、これから迎える第2の人生の日々を旧友たちとの交流を大切にして楽しく過ごしたいと思ったからでした。そうして一年の4ヶ月くらいを札幌で過ごしてもう4年ほど経ちます。

そんなある日に、大学時代からの親友から「北大総合博物館のボランティア」を引き受けないかという話が舞い込んできました。北大の博物館にはそれまでも何度か足を運んだことがあり、多くの動物標本や植物標本、各学部の研究の歴史展示など興味深い展示物がたくさんあったことを思い出し引き受けてみようという気になりました。

大学ミュージアムは近年多くの大学に設置されていて、各大学の特徴ある研究資料が展示されていますのでお勧めですが、やはり総合大学である東大、京大、北大は歴史もあり研究にも地域特性があり自然科学系学部を有しているだけに面白いと思います。最近ではNHK BSなどでスペシャル企画が放送されたほどです。東京大学総合研究博物館ではシーボルトの残した植物標本や江戸時代後期

の日本最古の虫標本(虫偏の生き物はとかげなど昆虫だけではありません)などが紹介されていました。また100年以上前に東大のある本郷で採取された植物や昆虫の標本から、当時の本郷がいかに自然豊かで、たくさんのわが国古来の植物や昆虫が生息していたかがわかります。明治後の都市化による自然の破壊を感じ、あらためて保護の大切さを感じる事が出来るものでした。

北大総合博物館のボランティアには多くの方が関わっています。植物標本、昆虫標本、菌類標本、考古学、化石、水産、歴史展示などに分類されていますが、私が参加したのは「第2農場」です。他大学のミュージアムでは展示の多くが研究資料、標本、化石などであり、おそらく農場そのものをミュージアム施設として公開しているのは北大だけだろうと思います。北大の敷地は南北に約1.6 kmありますが、第2農場は観光などで皆さんが訪れる中央部のメインストリート北端にあります。そしてその中の建築群は国の重要文化財に指定されています。重要文化財建築群を持つ大学は他にほとんどないかと思えます。

建築群のうち古いものは1877年、1878年に建築されて、その後1910年に現在の場所に移転された4棟で、それらは既に築後140年以上経ちます。1877年はクラーク博士が札幌農学校教頭として北海道にやってきた年で、これらの建築には博士が北海道に新しいアメリカ東海岸様式の酪農を根付かせようとする思いが詰まっています。寒冷で米作に適さない当時の北海道では酪農が開発に最も適しているとクラーク博士は考えました。最初の4棟の他にも大小合わせて8棟の建築群がありますがそれらは1909～1912年に完成したもので、博士の帰国後にその酪農を実践しようと建てられたものです。

左の写真の赤い屋根の建物は1909年建築の牝牛舎で今でもしっかりした木造造りの美しい建物



牝牛舎(右)と模範家畜房(左) (筆者撮影)

です。床も木が張られて、当時はあまり温度管理がされない牛舎では牛の寒さを気遣う珍しいものでした。

右下の写真はクラーク博士の考えを実践するために建てられたモデルバーン（模範家畜房）で1階が繋ぎ飼い式の牛舎、2階は牧草（乾草）を貯蔵する施設です。酪農はその後進歩して、牧草貯蔵はサイロ方式から現在の牧場で目にするロールベール方式となり、それに伴い効率的給餌と搾乳をするように牛舎も進歩しているそうです。

第2農場ボランティアの見習いとして先生の話聞いて驚いたことは、今は牛を育ててたくさんの肉と牛乳を生産するために穀物飼料をたくさん与えているが、牛は本来穀物を食べる動物ではないので、そのせいで牛が病気や短命になったり、生殖行動が取れない事例が多いという説明でした。確かに狭い牛舎の中で穀物をたくさん与える育成生産方式はクラーク博士が日本で実現しようとしていた酪農とはまったく違うように思いました。

現在、北大では牛にストレスをあたえないように、広い牧場で育てて、牧草を餌として飼育して、美味しい牛肉を生産し美味しい乳製品を作って、生産量が多少減っても経営が成り立つ研究を進めているそうです。

今、私たちは霜降り和牛が美味しいと言って食べたりしますがその育成方法は決して牛に優しくないので、考え直す必要があるように思いました。そんな風に考えていたらNHKが岩手県の

ある生産者に注目して、北大と同じように考えて、山を切り拓いてそこを放牧地とする山地酪農を実践し、それに着目した若い酪農志願者が集っていると報じていました。

さらに別の機会には豚の育成でも私たちがよく目にする豚舎ではなく広い牧場で放牧（放豚？）して美味しい豚が育つことを実践している帯広の養豚家のことも耳にしました。

今、環境や人権を重要な視点としてSDG'sが問われています。畜産業にもサステナブルな視点からの新しい視点が必要な時代だと感じざるを得ません。

私としては何となく友人に誘われて参加することになったボランティア活動ですが、新しい価値観から社会を見ることが出来る機会をもらったことに感謝して、環境と農業に興味を持って考えてみようと思った機会でした。



模範家畜房（筆者撮影）



1879年頃の模範家畜房(左)と穀物庫(右)
模範家畜房の2階へ牧草を馬車で運ぶスロープが見える。
北大総合博物館リーフレット「重要文化財『札幌農学校第2農場』より

活動報告

カルチャーナイト2022 チェンバロ コンサート

展示解説ボランティア 永岡明美

2022年7月22日（金）18時、ポプラチェンバロが皆さんの前で優しい音色を奏で始めました。最初の曲はフランスの作曲家ルイ・クーブランが親友に捧げた追悼曲。聴いている全ての人の心をそっと癒すように響きました。

約2年半、いろいろな出来事に人々の心が疲れてしまい、日常のほんの少しのささやかな楽しみでさえ許すことが難しい世の中になってしまいました。そしてそれを元通りに取り戻すことがどんなに難しいことかと思うとき、やっとチェンバロが息を吹き返しました。その後もスカラッタのソナタ、バッハのトッカータ、フランソワ・クーブランの小品。いつもは演奏者の新妻さんが解説をしてくださいますが今回はプログラムに詳細が案内されていました。

満席になった会場にはお子様たちの姿も。子供たちの大切な日常が奪われた2年半。今もいつもの幼稚園や学校生活が取り戻せていない我慢の日々を過ごし続けている子供たちにこの夏のコンサートが少しでも良い思い出のひとつになればと願います。

コンサート終了後にはチェンバロに触れる時間が設けられました。小さなお子さんは椅子にそっと座ってみたり、少し大きなお子さんは好きな曲を演奏して皆さんから拍手！初めてチェンバロに触れる大人も恐る恐る弾いてみる！誰が演奏してもチェンバロは優しい音色です。

チェンバロは丁寧に細やかにメンテナンスを続けなければ良い音は出ません。前号のニュースで報告なさっていますがコロナ禍の休館中も今回のコンサートの演奏者、新妻さんはじめチェンバロボランティアやスタッフの皆さんが大切にメンテナンスをしてくださっていました。感謝申し上げます。

今回、感染対策で人数制限のため整理券を配布していましたが配布開始時刻前からたくさんの方

が並び、あっという間に満席。残念ながら入場できなかった方も。これからもポプラチェンバロの優しい音色に引き寄せられ博物館へ人々が集い楽しめるチャンスができればと思います。博物館関係者はポプラチェンバロのことはよくご存知ですが実は北大生や先生方も知らない、とおっしゃる方が多いです。もったいない！

このニュースが発行される頃には毎週水曜日にやっていたミニコンサートが復活されていることを願っております。



演奏中の新妻美紀さん

活動報告

3年ぶりのカルチャーナイト公演

宇宙の4Dシアターボランティア・文学院中国文化論研究室 長谷川健太

2022年7月22日、3年ぶりのカルチャーナイト公演『Nociw kur ka maknatara (星影冴かに光れる北を) —アイヌの物語にみる星たち—』が開催された。公演本番の日、宇宙の4Dシアターボランティアのメンバーは浴衣や甚平を着て夏の夜を盛り上げる。これはなんとなくの僕たちの決まり事で、みんなそのために、新品をおろしたり着替えのために当日の集合時間を調節したりする。しかし僕は甚平を新しくおろしはしなかった。正直に言うと、おろす暇がなかったのである。今までに何度も洗濯をしてすっかり柔らかくなっていた甚平を着た時に「やっと始まるのだな」と身をもって感じた。今から、この日に僕が甚平に袖を通すまでのこととお話しようと思う。

いわゆる「コロナ禍」になってから、宇宙の4Dシアター公演はとんとご無沙汰になっていた。最後におこなったのは、2020年2月11日の『宇宙、行ってみる?』であり、それ以後、来館者はもちろんのこと、私たちでさえ“特殊な眼鏡”をかけて1階講演室から宇宙へ行ってみることはなかった。そうであるからこそ、2022年カルチャーナイト公演に向けて動き出した時の、喜びと力みは大きく、高揚感が我が身を包んだ。

公演での役割にはシナリオ作成、司会、パイロット(ソフトウェア「Mitaka」の操作手)、音楽、照明などがあるが、毎回ボランティアメンバーはそれらを持ち回りで担当する。今回僕は会場の飾りつけを担当した(当日は劇中劇での声の出演もした)。会場の飾りつけをするというのも、浴衣甚平の他にカルチャーナイト公演のなんとなくのお約束である。

今年はどんな飾りにしようか、担当に決まるや否やメンバーの力も借りつつ、あれこれと考え始めた。星形に切った折り紙を大量にちりばめて天の川に見立てるのはどうだろう、とメンバーの増田さんが提案してくださり、それをメインの飾り

として、他には扇形に折った折り紙を4つ繋ぎ合わせた丸飾りや色付きのセロファン紙を使った吊るし飾り、余った星形の折り紙を白いスズランテープに貼りつけた垂らし飾りを作ることにした。まずはひたすら星形の折り紙を作る。ボランティアメンバーほぼ総出で作る。空き時間にも作る。昼間に一人博物館の片隅で作っていたら、修学旅行生らしき方々が不思議そうにこっちを見ていた。丸飾りや吊るし飾り、垂らし飾りもボランティアメンバーのみなさんがいっぱい作業を手伝ってくれた。その後、石神さんが解説のために描いたアイヌ民族のイラストも飾ることになった。

本番前日。僕はこの日に会場の飾りつけを始めた。カルチャーナイト公演のための飾りだが、メンバーみんなで作った飾りをいち早く沢山の方々に見てほしかったからだ。最初は一人で作業するつもりだったが、長田さんも手伝ってくれた。二人ですると、案外早く完了した。

翌日、会場はスクリーンに映った宇宙と様々な飾り、そしてお客さんでいっぱいになった。多分、ひとりではここまでやり切ることができなかったであろう。こんな素敵な公演になったのは、一緒にやってくれるメンバーがいたからである。その思い出も、ひとつ、目には見えない飾りとして会場に加わっていた。ちなみに公演自体も大好評頂き、2か月後の9月17日には再上演された。これも全て、支えてくださったすべての皆様のおかげである。この場をお借りして感謝申し上げます。



飾りのイラスト

活動報告

社会人が大学院に通うこと

元平成遠友夜学校教頭・放送大学大学院修士2年 松田大徳

今年9月27日に平成遠友夜学校で、「社会人大学院」について講演しましたが、その内容を書きたいと思います。社会人大学院生とはいっても、仕事に関係がありキャリアアップとして通う院生と、仕事と学びたいことがあるから通う院生に分けられると思いますが、今回は後者を考えます。

私は、通信制大学院である放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻の修士課程で数学を学んでいます。来年3月に修了予定です。まずは、実際に社会人として大学院に通った際に感じたことを書かせていただきます。

社会人が大学院に通うにあたり、まず考えなければならない問題は単位です。特に修士課程の場合、修士論文作成以外にも講義を受け、必要な単位を取得する必要があります。平日の昼間に時間を作れる仕事であれば、講義を受けることも可能です。しかし、平日昼間勤務の場合は、通常の大学院の場合は講義を受講できないため、単位を取得できない可能性もあります。このような場合は、通信制大学院や土日に講義を実施している社会人向け大学院に通うことになるかと思われます。

次に考えなければならない問題は時間の制約です。仕事にもよりますが、平日昼間に働いている人の場合は、土日や祝日、夏休みなどのまとまった休みが取れる時に研究を進めることとなります。そうなるのと、講義と研究の両立もかなり厳しくなりますので、科目等履修生の制度を利用して、入学前に取得できる単位を全て取得する方が良く、さらに研究についても、入学前にある程度進めておくとうまいかと思われます。研究テーマを考えて先行研究を調べて、具

体的に何を解決するべきかまで考えておくことが必要かと思われます。

また、自分の入りたい研究室への訪問は確実にするようにしてください。大学院生全体に言えることですが、教員とのコミュニケーションは非常に重要です。特に社会人大学院生の場合は時間的な制約が多いため、教員の理解が得られなければ、大学院生活は失敗に終わる可能性が高いです。ただし、私が通っている放送大学大学院は、研究テーマに合わせて指導教員が決まりますので、研究室訪問をしなくてもよい珍しい大学院です。

大学院の入試試験は筆記試験と口頭試問の2つです。筆記試験は、過去問題を解けるくらいの学力があることが望ましいです。社会人大学院生はとにかく時間が足りないため、基礎知識の勉強をしながら、研究を進めていくのは非常に大変です。口頭試問は大学院に入ってから研究しようとしているテーマについて、提出された資料をもとに面接されると思われます。標準修業年限で研究可能であるか、研究テーマについての知識などが十分であるか、仕事と両立しながら研究可能であるかなどを見られます。

大学院に入ったら、とにかく時間がある時は研究を進めることです。仕事で疲れてやる気がないこともありますが、そこで脱落しないことが大切です。

文字数の制限があり、具的などところまで書けませんでした。いかがでしたでしょうか。私は来年4月からは、博士課程院生として道内の大学院に在籍し、査読付き論文の執筆にチャレンジする予定です。これについても、いつか記事に書きたいと思っています。

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No.64

- ◆編集人:北海道大学総合博物館 ボランティアの会(編集委員:星野フサ、今井久益、久末進一、山岸博子)
- ◆発行人:在田一則
- ◆発行日:2022年12月1日
- ◆連絡先:〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel:011-706-2658
- ◆ボランティアニュースは、バックナンバーも含め、総合博物館ホームページからご覧になれます。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/lifelongeducation/volunteer/volunteernews/>